

「発達障害のある子どもの学び」 取り巻く環境

① 努力してもできないことをするように求められる

先天性の特性として理解してもらえない

- ・発達凸凹（認知能力の高い部分と低い部分）は誰にでもある。発達障害のある子どもはそのばらつきが大きい
- ・能力のばらつきが大きいだけなのに、その支援は特別なことだと考えられている
例：視力の低い子は教室の前方に座る等の配慮があるが、文字の認識が難しい子は自助努力が求められる



② 自尊感情を損なう

できない改善を求められ、失敗を繰り返し怒られ続ける

- ・苦手な凹は先天的なものであり、改善が難しい。しかし、周囲の大人は凹に注目して「なぜできない」と努力するよう求める
- ・先生や親から、他の児童と同じようにできないことを努力不足だと叱責され続ける。それにより、自己肯定感が低下し、自尊感情が損なわれてしまう



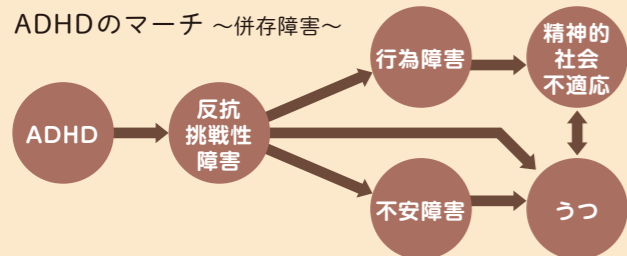
③ 二次障害へと進んでしまう

先天的な障害への周囲の理解不足が、後天的な障害を生む

- ・親に叱られたり、友達から仲間外れにされるなどにより、発達障害の初期段階で対応できない場合には、うつや不登校、非行などの二次障害へと進む恐れがある
- ・「親の育て方が悪い」などと親が非難されることにより、子どもだけでなく親も二次障害になることがある
- ・初期で対応できず二次障害に進めば回復するのに非常に多くの時間を要する



二次障害に進んでしまう例



薬による治療

ADHDは薬による対応で8~9割の子どもが改善し、二次障害を防ぐことができるといわれている

治療目的

- ・症状の軽減
- ・二次障害（合併症、併存障害）の予防
- ・QOLの改善

④ インクルーシブ教育という選択肢が少ない

学校によって捉え方が異なっている

- ・インクルーシブ教育システムとは、障害のあるなしにかかわらず、すべての子どもたちが地域の学校で共に学べる教育である
- ・障害のある子どもに学びやすい環境は、障害のない子どもにも学びやすい環境だといわれている。その結果、発達障害と認識されていない子どもにも学びやすい環境となると考えられる
- ・インクルーシブ教育システム構築のためには、すべての教員が特別支援教育に関する一定の知識・技能を有していることが求められる
- ・障害のある児童が通常学級の学校行事の時にだけ参加することを「インクルーシブ教育を実践」と謳っている学校もあり、「インクルーシブ教育」の捉え方はさまざまである
- ・発達障害のある子の保護者がインクルーシブ教育を求めたとしても、その実現は難しい

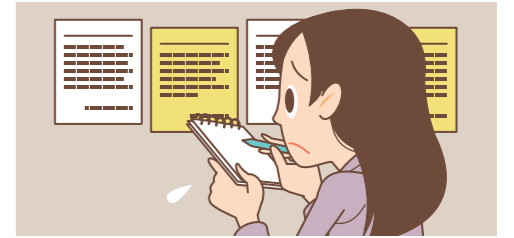


⑤ 学校を卒業後の将来を見越した教育がなされていない

卒業後の社会生活までを考えた

教育や訓練などを受ける機会が少ない

- ・特別支援学校/学級を卒業したあとの進路の選択肢が限られている
- ・卒業後の社会生活のためには、職業訓練のような経済的自立以外にも生活スキルの訓練も必要である



社会適応に必要なのは経済的側面だけではない

自己信頼感、自己肯定感を培うことができれば、自己受容、他者受容ができ、社会適応することができる

社会適応へのステップ▶



それぞれの立場からの視点

本人



- ・子どものときと大人になってからは異なる感情
- ・子どもの頃はただただつらかった。今思うと、努力の仕方を間違えていた
- ・大人になって「どんな時も人生に意味はある」と思えるようになった

保護者



- ・努力が足りないと子どもを叱ってしまったが、発達障害だとわかったあとは自責の念にかられた
- ・日々の学校生活への対応が大変で、子どもの将来を考えてどうすればいいのか考える余裕がなかった

学校



- ・30人学級では個別対応は難しい
- ・授業以外にも業務が多かったりで余裕がない
- ・他の児童の保護者の理解が得られないと対応が難しい
- ・校長の方針次第で対応が変わる

医師



- ・発達障害を診断できる医師が少ない
- ・短時間で診断するのは難しい
- ・あくまで受診者への対応しかできないため、限定的な支援になってしまう

地域特別支援教育 コーディネーター



- ・学校を支援する立場なので、環境を整えることが主な支援となる
- ・専門的ではあるが、担任につきっきりでの指導はできない
- ・学校や教師によって温度差がある